

# 半井本『医心方』所載アクセントの中低型語小考

—「舞へ舞へ」かたつぶり」再考—

西 崎 亨

## 1

ある語の存する場合、その語形が一形態素でなっているか、複数の形態素からなっているのかという視点は、その語の解釈と理解には不可欠である。複数の形態素からなっている場合、その形態素が単に接続しただけの語形であるのか、その形態素が複合して熟合した語形であるのかという点が問題となる。前者は接続語であり、後者は複合語ということになるのか。

ところで、複合語であるのか接続語であるのかを識別する有効な視点の一つに、その語のアクセントが中低型であるか否かという点がある。

小松英雄氏が、「アクセントのはたらき」(『日本語の世界7』中央公論社)において、「中低型」の語について「複合が完成していなかったと見なすべき」ものとして、「文学作品の正しい鑑賞のためには、こういう点(筆者注・複合語のアクセント)についての確かも、しばしば必要であり、また有効である」、「アクセントの変遷」(岩波講座『日本語5音韻』の「複合と意味」において、「アクセント史は、しばしば、語義に対する繊細な配慮をも必要となることになる」と指摘する。ところで、小松氏の記述「複数の形態素から

なる所与の形がひとまとまりの複合語になっているか否かを的確に判断することは、しばしば困難である」ものではあるが、「語」の正しい解釈と鑑賞にとつては、避けては通れないであろう。以下は半井本『医心方』所載アクセントの中低型語についての報告と所用語例の若干の小考である。

## 2

本稿において、対象とした『医心方』は半井本を主たる資料とし、仁和寺本を時に比較の対象とした。

半井本卷子本三十巻のうち、鎌倉時代期書写の巻第四の一巻、江戸時代期書写の巻第二十二・巻第二十八の二巻以外の二十七巻は平安期の書写になるものである。なお、平安期書写の二十七巻のうち巻二十五・巻二十九の二巻以外の二十五巻は天養二年(一一四五)加点になるものである。当該本の依拠文献は『国宝半井家本医心方』(オリエント出版社、一九九一)である。

仁和寺本粘葉装本は、巻一・巻五・巻七・巻九・巻十の五冊で、院政期の書写になるものである。当該本の依拠文献は『仁和寺本医心方』(大塚巧藝社、一九三五)である。

右の書を依拠文献とし、秋永一枝・坂本清恵・佐藤栄作編『医心方声点付和訓索引』（アクセント史資料研究会、二〇〇一）を依拠資料、拙稿「仁和寺本・半井家本『医心方』声点付万葉仮名和訓纂」（『武庫川国文』41、一九九三）を参考資料として、中低型差声訓を抄出する。

当該資料は、標出語に対して万葉仮名（時に片仮名）による和訓が付されており、声点による差声の加点が見られる。例えば、標出語「丹黍米」に対して右傍に「阿加支々美」とあり、声点によって「平上平平上（○○○○●●）」の差声が見られる。「阿加支々美」は「あかし（赤し）」（形容詞）の連体形と「きみ（黍）」（体言）からなる連語である。

右の例に示すように、標出語に対する和訓は単一語あるいは連語の場合に関わらず、中低型の状況の認められる例を次に一覧として示す。

掲出語		和訓表記・声点		備考	
上平上（●○○●）				アカサノハヒ（●●○○○○●●）（観）	
あかざ（丹黍）	体	阿加佐乃波比（●○○●●●●●●●）（半）		阿加佐乃波比（●●○○○○●●）（京）	
				阿加佐乃波比（●●○○○○●●）（伊十）	
				阿加佐乃波比（●●○○○○●●）（伊廿）	
				阿加佐（●○○○）（京）	
				阿加佐乃波比（●○○○○×●●）（仁）	
をかき（牡蠣）	体	乎伽岐乃伽比（●○○●●●●●●●）（半）		ヲカキノカヒ（●○○××××）（半）	

『医心方』の中低型アクセント語彙一覧

次表の凡例を示す。標出語（見出し語）の宛漢字を（ ）に示し、一語（体言）可否（連語）かを「体」「連」によって示す。「和訓表記・声点」及び「備考」欄には標出語と同一の差声訓例を『医心方』『類聚名義抄』『和名類聚抄』から示す。因みに、半井本『医心方』・仁和寺本『医心方』を各々（半）・（仁）、観智院本『類聚名義抄』・図書寮本『類聚名義抄』・鎮国守国神社本『類聚名義抄』を各々（観）・（図）・（鎮）、神宮文庫蔵本十卷本『和名類聚抄』・神宮文庫蔵本二十卷本『和名類聚抄』・東大国語研究室蔵本『和名類聚抄』を各々（伊十）・（伊廿）・（京）、『色葉字類抄（三卷本）』を（色）と標示する。

平上平上 (●○○●●)

ぬはのみ (鬼白)

連

奴波乃美 (○○●●) (半)  
奴波乃美 (×●●●) (仁)

はひしば (黄芩)

体

波比之波 (○○●●) (仁)

上上上平上 (●●●●○○)

あふひのみ (葵実)

くれのおも (懷香子)

連 連

阿布比乃美 (●●●●●) (半)  
久礼乃於毛 (●●●●●) (半)  
久礼乃於毛 (●●●●●) (仁)

上上平上平 (●●●●○○)

もちつつじ (羊躑躅)

体

毛知都々之 (●●●●●) (半)

上上平平上 (●●●○○●)

あふちのみ (棟実)

うばらのみ (营実)

連 連

阿布知乃美 (●●●○○●) (半)  
宇波良乃美 (●●●○○●) (半)  
宇波良乃美 (●●○○●) (仁)

上平上上平 (●○○●●○○)

こやすくさ (鳶尾)

体

古也須久佐 (●○○●●○○) (仁)

ヌハノミ (○○○○●) (半)

ヌハノミ (○○○○×) (仁)

ヌハノミ (○○●●×) (半)

□ハノミ (×●●○○) (半)

波比之波 (○○○○●) (半)

ハヒシハ (○○○○●) (半) 二例

クレノオモ (●●×××) (観)

久礼乃於毛 (●●●○○●) (京)

毛知都々之 (●●●●●○○) (仁)

毛知豆々之 (●●●●●○○) (図)

毛知豆々之 (●●●●●○○) (京)

古也須久佐 (●●●●○○) (半)

やはらくさ (蕪荑)

体

也波良久佐 (●○○●●○) (仁)

古夜須久佐 (●●●●●●) (京)  
也波良久佐 (●●●●●○) (半)  
ヤハラクサ (●●●●●○) (半) 二例

上平上平 (●○○●○○)

やまついも (山芋)

体

也末都以毛 (●○○●○○) (半)

也末都以毛 (○○●○○○) (仁)  
ヤマツイモ (○○●×××) (観)  
夜末都以毛 (○○●○○○) (伊廿)

上平上上 (●○○●●●)

あきのふた (甲香)

連

阿支乃布多 (●○○●●●) (半)

平上平上 (○○●●●●)

あはのもち (秬米)

連

阿波乃毛知 (○○●●●●) (半)

あはのよね (秬米)

連

阿波乃与祢 (○○●●●●) (半)

かたつふり (蝸牛)

体

加多都布利 (○○●●●●) (半)

ふけるかね (剛鐵)

連

布介留加祢 (○○●●●●) (半)

ふねのあく (敗船筋)

連

布祢乃阿久 (○○●●●●) (半)

カタツフリ (●●●●○○) (観)  
カタツフリ (●●●●××) (鎮)  
フケルカネ (○○●○○×) (観)

平上平平上 (○●○○○●)

あかきさみ (丹黍米)

連

平平上平上 (○○●●●●)

きなるさみ (黄粱米)

連

上上上上上 (●●●●○○)

なつめのはり (白棘)

連

上平上上上 (○○●●●●)

あかざのはひ (冬灰)

連

上平上平平 (●○○○○○)

をかきのかひ (牡蠣)

連

平上平平平上 (○●○○○○●)

たつのきのみ (女貞)

連

平平上平上 (○○●○○○)

やまぬやまひ (奔豚気)

連

阿加支々美 (○●○○○●) (半)

支奈留支美 (○○●○○●) (半)

奈都女乃波利 (●●●●○○) (半)

阿加佐乃波比 (○●○○○●) (半)

阿加佐乃波比 (●○○○×●) (仁)

乎加岐乃加比 (○●○○○○○) (半)

太ツ乃岐乃三 (○●○○○○●) (半)

ヤマヌヤマヒ (○○●○○○) (半)

アカキ、ヒ (●●●×○) (観)

阿賀木々美 (●●●●●) (伊廿)

アカサノハシ (●○○○○○) (観)

阿加佐乃波比 (●○○○○○) (京)

阿加佐乃波比 (●○○○○○) (伊十)

阿加佐乃波比 (●○○○○○) (伊廿)

ヲカキノカヒ (●○○×××) (半)

ヤマヌヤマヒ (○○●○○○) (仁)

ヤマヌヤマヒ (○○●×××) (半)

去上上平上平(去●●○○●○)

へみのいちご(蛇苺汁)

連

上上上上平平上(●●●●●○○○)

かにはくらのみ(櫻桃)

連

※「かにはざくら」の誤か？

みつふきのみ(鶏頭實)

連

上上上平上上(●●●●○○●●)

ぬでのきのむし(樗鷄)

連

上上上平上平(●●●●○○●○)

とりのあしくさ(升麻)

連

平上平平平上(○●○○○○○●)

あはのうるしね(粟米)

連

平平平上上上(○○○○●●●○)

にがうりのほぞ(瓜蒂)

連

倍美乃以知古(○●●●○○○)(半)

倍美乃以知古(○●●●○○○)(仁)

加余波久良乃三(●●●●○○○)(半)

美ツ不々支乃美(●●●●○○○)(半)

奴天乃支乃牟之(●●●●○○○)(半)

止利乃阿之久佐(●●●●○○○)(半)

止利乃阿之久佐(●●●●○○○)(仁)

阿波乃宇留之祢(○●○○○○○●)(半)

余加宇利乃保曾(○○○○●●●○)(半)

水フ、キノミ(×●●○○○)(観)

トリノアシクサ(●●●●○○○)(観)

トリノアシクサ(●●●●○○○)(色)

止利乃阿之久佐(●●●●○○○)(京)

アハノウルシネ(○●○○○○○●)(観)

阿波乃宇留之祢(○●○○○○○●)(伊廿)



平平平上平上上平 (○○○●●●○○○)

かはうすきはだ (小麿)

連

加波宇須岐々波多 (○○○●●●○○○) (半)

平平平上平上上上 (○○○●●●○○○●●●)

くずかつらのむし (葛上亭長)

連

久須加ツ良乃牟之 (○○○●○○○●●●) (半)

平平上平上上上上上 (○○○●●●●●●●●●)

ひひるのふたこもり (蛭蜃蛾)

連

比々留乃布多古毛利 (○○○●○○○●●●●●●) (半)

平上平上上上平上上上 (○○●●●●●●○○○●●●)

ふるきふでのつかのはひ (筆頭灰)

連

不留支不弓乃都加乃波比 (○○●○○○●●●○○○●●●) (半)

平上上上上上平上上上 (○○●●●●●○○○○●●●)

つちをはりてつくるみつ (地漿)

連

都知乎保利天都久留美都 (○○●○○●○○●○○●○○●) (半)  
都知乎保利天都久留美都 (○○●○○●○○●○○●○○●) (仁)

以上に示した標出語単位での中低型アクセントの例の八割が連語である。

単語単位での中低型の語は、平安時代後期の書写になる半井本巻第一の次の九語である。

上上上 (●○○○) あかぎ (丹黍) (巻一)・をかき (牡蠣) (巻一)

平上平上 (○○●●●●) はひしば (黄芩) (巻二)

上上平上平 (●●○○○○) もちつつじ (羊躑躅) (巻一)

上平上上平 (●●○○○○) こやすくさ (鳶尾) (巻一)・やはらくさ (蕪荑) (巻一)

上平上平平 (●○○○○○) やまついも (山芋) (巻一)

平上平上上 (○○●●●●) かたつふり (蝸牛) (巻一)

平上平上上平 (○○●●●●○○) はやひとくさ (澤漆) (巻一)



右に示した一覧では、各掲出語の「備考」の項に、標出語の他資料『類聚名義抄』『和名類聚抄』等―の差声訓例を示した。「かたつぶり」のみが『類聚名義抄』（観智院本・鎮国守国神社本）に「●○○○」[●●●●×]と中低型であるが、他の語は中低型ではない。

「かたつぶり」以外の七語については、半井本『医心方』では中低型の語が『類聚名義抄』『和名類聚抄』等で中低型ではないと言うことは、『類聚名義抄』『和名類聚抄』等においては複合が完成していることを意味することになる。因みに、例えば「こやすくさ」「やはらくさ」「はやひとくさ」については「こやすくさ」「やはらくさ」「はやひとくさ」「もちつつじ」は「もちつつじ」「こやすくさ」「まつついも」は「やま+つ+いも」「をかき」は「を+かき」「あかざ」は「あ+かざ」等の二語の連接した語と考えられないこともない。しかし、複合語か連接語かということが、二つの形態素をそのままあわさっただけなのか二つの形態素の複合が完成したものであるのかということが、文学作品の鑑賞に関わるものであるならば不用意な判断は避けなければならない。そのためには用例の類聚を俟ってより検討を重ねる必要がある。従って、ここでは『類聚名義抄』の差声においても中低型の「かたつぶり」のみを考察の対象とする。

### 3

中低型差声語「かたつぶり」のアクセントと解釈の問題を考えた。

「かたつぶり」については、小松英雄氏が「アクセントのはたらき」〔日本語の世界7 日本語の音韻〕中央公論社）のなかで、

たとえば、「かたつむりの古形である「かさつぶり」の転訛したものであるということが、有名な方言研究書に記されている。「かさ」は「笠」、「つぶり」は〈円い巻貝〉の意であるという。「笠」という見立てはあまり自然ともいえないが、一つの説明であることは認めざるをえない。「サ」と「タ」との交替も、一般論としては可能である。ただし、この場合について、なぜ交替が起こったかの説明は難しい。少なくとも語構成についての意識が生きている間は、そういう交替が生じにくいはずである。

として、『類聚名義抄』（僧下二一）の「蝸牛」「蝸」として「カタツブリ」に差声「●●○○」が見られるが、その差声について、

蝸牛 カタツブリ「●●○○」 笠 カサ「○○」

「カサ」が「○○」であるのに、「カタツブリ」の方は語頭音節が「●」になっているので、これでは都合が悪い。（おでき）の意味の「かさ」なら「●●」であるが、それではこじつけに過ぎる。しかし、このように無理な結び付けをしなくても、形容詞「堅し」は「●●●」であるから、「かた」をその語幹であると見れば簡単に説明できる。

とする。そして、『梁塵秘抄』（四〇八）の「舞まゑ・舞かたつぶり・舞まゑものならば、馬の子や牛の子に蹴むまさせてん、踏ふみ割わらせてん、眞まことに愛うつくしく舞うたらば、華の園まで遊あそばせん、（本文は、日本古典文学大系73『梁塵秘抄』による）の「かたつぶり」に関して、

「かた（堅）」という構成の諸語はいずれも「●●」になっているから、「つぶり」の方は、「○○」ということであったらしい。すなわち、「かたつぶり」というのは、「かた」と「つ

ぶり」との二つの形態素をそのまま重ね合わせただけの構成で、  
「かたつぶり」という意味を顕在的にもつていたと考えてよさ  
そうである。

と解釈している。この解釈に従うならば、先の大系本『梁塵秘抄』  
の頭注に見られる「蝸牛……かたつむりよ、舞わないようであつた  
ら。」といった注は不用意な「注」であろう。因みに、頭注の解釈  
は複合語として完成した場合のものであろう。

ところで、半井本『医心方』巻一に見られる

蝸牛 加多都布利【○○●●●】

の「かた」の語頭音節は「○」になっているので、小松氏が「都合  
がわるい」とした「笠 かさ【○○●】」（観智院本『類聚名義抄』）  
も不用意には都合がわるいとはならないことになる。

「かたつぶり」の「かた」の語頭音節が「○」の「かた」には、

肩 カタ【○○●】 前田本『和名抄』、観智院本『類聚名義抄』

「○」の「かさ」には、

笠 カサ【○○●】 東大國語研本・伊勢十卷本・伊勢廿卷本『和

名抄』、観智院本『類聚名義抄』

瘡 カサ【○○●】 高松宮本・林羅山書入本『和名抄』

等が確認される。「肩」「瘡」については無理な結び付けで、ここで  
は「笠」の意であろう。

「つぶり」については、『類聚名義抄』には「○○●○」とあり、『医  
心方』（半井本）には「○○●●」とある。

ところで、小松英雄氏は前述の引用のように「つぶり」は『つ  
ぶら』と同源で「円いもの」を意味しているらしいとする。「つ  
ぶら」については、内閣文庫本『日本書紀人皇卷』に「豆夫羅（圓

●●●）、兼右本『日本書紀人皇卷』に「ツフラ（の）オホイオホ（圓  
大臣）●●●○○○××」との差声例が見られる。「つぶら」の語  
頭音節は「●」である。「かたつぶり」の「つぶり」の『類聚名義抄』  
の「つ」は「○」であるので、安易には「つぶり」と「つぶら」と  
が同源とは言えないかもしれない。「つぶら」の差声例の類聚を俟  
たなくてはならない。因みに、小松氏は「つぶり」については  
その古いアクセントが直接にわからない」とはする。

「つぶり」の「○○●●」については、

禿鷄 ツフレナル（とり）【○○●○○××】

の例が天理図書館蔵兼右本『日本書紀』人皇卷（鈴木豊編『日本書  
紀人皇卷諸本 声点付語集索引』アクセント史資料索引一九による）  
に見られる、

禿 ツフレ【○○●●】

などは参考になろうか。

「かたつぶり【○○●○○●】」は「かさ（笠）【○○●】」と「つぶれ（禿）  
【○○●●】」との二つの形態素がそのまま接続しあつた、所謂連接語  
であつたとも考えられようか。

「かた」を「堅」と見て「かたいつぶり」という意味を顕在的に持つ  
ていたとする小松氏の解釈の方が『梁塵秘抄』四〇八の童謡の面白  
さは確かにあるとは思われる。しかし、「かた」の語頭音節が「○」  
となっている半井家本『医心方』の差声例は、複合語の語頭音節の  
法則的事実たてば、小松説以外の解釈を想定しなくてはならない  
ことも事実であろう。

田島毓堂氏が、東辻保和他編『平安時代複合動詞索引』（清文堂出版）の推薦文で、

日本語において、古く（筆者注・鎌倉時代ぐらいまで）は複合動詞というものはなかったといわれることがあります。いくつかの根拠を上げて、単にそれらは動詞が連続したにすぎないということです。連濁をしないということなどは必ずしもそうとは限らないと思いますし、（略）語によって複合語において一定の位置的決まりのようなものがあることが示されれば、もはや単なる動詞連続だとはかりはいえなくなるのではないでしょうかと記している。

また『平安時代複合動詞索引』の凡例では、複合動詞の採集方針について、「動詞連用形に動詞が下接したものを基本とし、以下に示すもの（筆者注・動詞出自の接頭辞・動詞型活用 of 接尾辞、敬讓の補助動詞等）も、語彙論・意味論的立場から、複合動詞の構成要素として広く採用」と記されている。

ところで、二つの形態素をそのまま重ね合わせただけの構成の連接語であるか、二つの形態素が一つの形態素として複合が完成して熟合した複合語であるかの確認は、その語の理解には極めて重要な視点であることは揺るがない点であろう。先に示した田島毓堂氏の推薦文、凡例の採集方針は、より厳しく「複合」の意味を問う必要があるのではないのだろうか。

宮島達夫氏が「総索引への注文」（『国語学』76）で、ある語を一語と扱うか二語と扱うかといった点について学問的な問題であることを指摘する。「『このごろ』を一語にするか『この』と『ごろ』と

にわけるか、連濁のありなしについての音韻史の見解に左右される。」と例示する。

「よみ」に関わって「山川」を「やまかわ」と読むか「やまがわ」と読むかで「山」「川」と分けて二語と扱うか、「山川」を一語と扱うかでその意味把握に大きい差異を生じる。因みに、連濁することでも「山川」は一語（複合語）となり、連濁しない場合は二語（連接語）となる。

なお、連接語か複合語かの識別には、連濁とは別にアクセントの視点のあることは先に記したとおりである。

「かたつぶり」の現代のアクセントについては、「○○●○○」（『明解日本語アクセント辞典』）とある。また現代京都アクセントでは「●○○○○」（『○○●○○』）（『日本語アクセント史総合資料 索引篇』）と見える。現代の「かたつぶり（む）り」は複合の完成した複合語であるが、観智院本『類聚名義抄』・半井本『医心方』の場合は、中低型であるので未だ複合が完成していない連接語と見なすべきものであろう。

拙稿『類聚名義抄』所載アクセントの中低型語小考」（『武庫川国文』68号）において、「平安時代複合動詞索引」に所載される語について中低型語の幾つかを抄出したことがある。それらについては未だ複合の完成していない状態の語として、二つの形態素を合わせただけの連接語として処理すべきものであろう。この点で「平安時代の複合動詞」としては問題があるのではないかと思われる。

「かたつぶり（む）り」の例がそうであるように、古くは二語であったものが現代では一語ではある。しかし、いつから中低型ではなくなったかは、まさに学問的なアクセント史の問題である。だが、そ

れらを確認する資料（史料）が現時点では必ずしも存在するわけではない。差声訓が確認できても、前の「かたつぶり」の「かた」の「●」「○●」ように異なる場合がある。「複合語の語頭音節の高低は、その複合語の先部要素となっている語の、語頭音節の高低をそのまま継承している」（金田一春彦『國語アクセントの史的研究 原理と方法』）という法則に従えば、アクセントの型の違いは当然語義の違いとなる。

田島毓堂氏は、前に示したように、複合動詞に関してのみではあるが、鎌倉時代頃までは複合動詞が成立していなかったする点に関して寛大なように思われるが、複合語か連接語であるかについては、文学作品の理解・鑑賞のためには極めて重要な視点であろうと思われる。

複合語か連接語かの識別の重要な視点が、音韻史・声調史といった学問的な問題であり、その史料においても極めて限定的ではあるが、それだけに一語一語に真摯に向き合うことが求められるものと思われる。

「かたつぶり」一語の異なった差声の例に、一語の意味理解への確認の必要性和文学作品の解釈・鑑賞の難しさを今更ながら思い知らされたことである。

（にしぎみ・とおる 武庫川女子大学名誉教授・元京都女子大学教授）